

# 中学生の不登校傾向と親および友人への愛着との関連

板村孝一\*・田邊敏明

Junior high school students' tendency toward non-attendance at school and attachment to parents or friends.

ITAMURA Kohichi and TANABE Toshiaki

(Received September 28, 2012)

キーワード；中学生，不登校傾向，愛着

## 問題と目的

不登校の問題について、文部科学省（旧文部省を含む）は平成3年より毎年、全国の小・中学校における不登校児童生徒の状況を調査し、不登校の児童生徒数を発表している。平成22年度については平成23年8月に文部科学省（2011）が、『平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」』において中学生の不登校生徒数を報告し、前年度と比較して、6809人の不登校生徒数が減少していると報告している。したがって、平成19年度からは3年連続して減少傾向が続いていると言える。減少の理由として、スクールカウンセラーの各校への配置，教育支援センターや適応指導教室の充実による不登校生徒へのきめ細やかな支援，また，中1ギャップの対策としての小中学校の連携の推進などが考えられる。それらの効果が徐々にではあるが上がってきており，教職員による生徒への日頃の指導や支援が功を奏しているとも言える。

しかし，不登校生徒数の減少の理由は少子化による全生徒数の減少のためだという指摘もある（レーベン心理相談研究所，2011）。つまり，全生徒数に対する不登校生徒の割合を見ると，平成21年度が3,612,747人に対して100,105人（2.77%）であり，平成22年度は3,406,844人に対して93,296人（2.74%）である。不登校生徒数が減っているのは事実であるが，全生徒数に対する不登校生徒数の割合の差は0.03%の減少であり，不登校生徒数の減少はほぼ横ばいとも考えられる。また，文部科学省による不登校の定義では「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しない，あるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち，病気や経済的な理由による者を除いたもの」であり，保健室や相談室への別室登校や適応指導教室やフリースクール・相談機関への登校は出席扱いとなり，欠席とならず不登校として報告されないケースもあり不登校生徒数が減少したのではないかという見方もある。石川（2000）は，1992年の文部科学省による「どの子にも宣言」の後，保健室や相談室に通うことやフリースクールに通うことを出席と認める特例を発令し，それらに通う子どもは実質的には不登校数にはカウントされておらず，出席扱いとなっていると指摘し

\*現在長門市立菱海中学校教諭

平成23年度山口大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校臨床心理学専修修了

ている。さらに石川（2000）は、また、文部科学省が分類している不登校の理由による7つの不登校のタイプ（「学校生活に起因する型」「遊び・非行型」「無気力型」「不安など情緒的混乱型」「意図的な拒否の型」「複合型」「その他」）ではなく、新たに「医療型」「在宅自閉型」「在宅開放型」「非在宅校内型」「非在宅校外型」「非行型」の6つの不登校型に分類し、それらのうちのひとつである「非在宅校内型」が文部科学省による従来の分類では不登校に含まれず、「隠れた不登校」と表現している。したがって、文部科学省の報告における中学生の不登校生徒数が減少したという点については楽観的に喜べないのが事実であり、不登校の問題は今後も取り組むべき問題のひとつであると言える。

また、文部科学省による報告（2011）において中学生の「不登校になったきっかけと考えられる状況」として、不安など情緒的混乱（20,646人・22.1%）、無気力（20,502人・22.0%）、いじめを除く友人関係をめぐる問題（15,112人・16.2%）が多く、次いで「学業の不振」（8,136人・8.7%）「親子関係をめぐる問題」（8,122人・8.7%）が続いていた。しかし、家庭に係る状況としての「家庭の生活環境の急激な変化」（4,374人・4.7%）や「家庭内の不和」（3,477人・3.7%）が子どもに及ぼす影響を考えると、不登校になるきっかけとして家庭での親との関係がさらに大きな要因だと考えられる。このことから、不登校になるきっかけとして友人との関係や親子の関係が深く関係していることが推察される。

一方、不登校の問題における研究は今までも多くの研究者によってなされており、不登校の問題がいかに重大であり、多くの関係者に関心をもたれているかがわかる。五十嵐・萩原（2004）は、学校へ登校はしているが学校生活を楽しむことはできておらず、不登校の前駆的状況である状態を「不登校傾向」と定義し、不登校傾向を4つのタイプ（「別室登校を希望する不登校傾向」「遊び・非行に関連する不登校傾向」「精神・身体症状を伴う不登校傾向」「在宅を希望する不登校傾向」）に分類し、幼児期における親への愛着との関連を探った。「不登校傾向」については以前より、森田（1991）が、いまだ欠席に至っていない登校回避感情を示す潜在的な不登校現象の「グレイゾーン」について考察し、不登校現象への実態調査は、長期に至らない欠席生徒、および潜在的な不登校生徒を組み込むことによってその裾野の広がりをはっきりと、現象の全体像に接近することができるとしている。また、佐藤（1993）は、親および親以外の対象への愛着が対人関係の持ち方とどのように関連するかについて中学生、高校生と大学生を対象に検討している。中学生を対象とした場合、親との愛着が低くても友人との愛着が高ければ対人不安は低いとされる。しかし、高校生では親との愛着関係と友人との愛着関係の両者が整わなければ、対人不安は高いという結果が得られている。この結果は、高校生という自己を確立していこうとする段階では、真の友人を見つけるためにも、人格形成の基盤となる確固とした親との愛着が必要とされると考えられる。一方、その前段階での中学生では、親からの心理的絆を失った、あるいは親子の関係がもともと希薄なことから起こる孤独をいやしてくれる対象としての友人を求めると考えられる。さらに、酒井ら（2002）は、中学生の親および親友との信頼関係と学校適応について検討し、中学生段階では親子相互に不信を抱いている場合、友人との間が信頼関係で結ばれていれば、親友との信頼関係と非行傾向の間に正の相関が見られるとしている。また、親友との信頼関係の良好さがネガティブな学校適応の要素である「不安な気分」や「孤立傾向」などの低さと関連があるとし、親との間に相互の信頼関係がある子どもは、親友との信頼関係の高低にかかわらず学校での適応がほぼ良好であると述べている。

以上のように、子どもは幼児期以降、親との愛着を基盤にしていろいろな対象との愛着関係を築いていくが、不登校傾向との関連で、中学生の時期には親との愛着に加えて特に友人との

愛着関係が大切だと思われる。愛着について Bowlby (1969, 1973, 1980) は、愛着を『ある人と愛着対象(人物)との間の絆やつながりである』と定義し、安全、安心、保護への欲求に基づいた絆であり、親子関係においては、乳児や子どもに対して使われ、愛着対象は主要な養育者のことを指すとしている。また、幼少期における特定の対象への愛着が内的作業モデルを形成し、その後の対人関係を規定すると考えられている。佐藤(1993)は親以外の対象への愛着として友人だけではなく恋愛の対象や兄弟姉妹など様々であるとしているが、中学生にとって親以外の愛着の対象として最も身近で重要な存在は、やはり友人であると考えられる。特に、不登校やいじめの問題だけではなく、思春期の時期の子どもにとって、学校での生活が楽しくなるかどうかを決める要因は友人との関係が良好であるかどうかによると言っても過言ではないだろう。Bowlby (1969, 1973, 1980) が愛着行動は乳幼児期を過ぎると消え去るのではなく、青年期、成人期以降も持続し、揺りかごから墓場まで、人生において重要は役割を果たすことを繰り返し述べ、愛着の内的作業モデルを提唱していることを考えると、中学生にとっての友人は、最も重要な愛着対象として考えられる。また、五十嵐・萩原(2004)も、「遊び・非行に関連する不登校傾向」について、父母への「安心・依存」と負の相関、「不信・拒否」と正の相関が見られたと論じている。たとえ非行や反社会的傾向の不登校をもたらされても親友との愛着が必要とされている。一方、在宅や別室登校を希望する不登校傾向では、異性の親や母親への「安心・依存」との間に負の相関が、「不信・拒否」との間に正の相関が見られることを報告している。これは、酒井(2002)らの、子が親に抱く信頼感が低い場合、親子相互に信頼している場合と比較して学校での「孤立傾向」の得点が高いという指摘と類似していると言える。また、不登校に重要な影響を及ぼすと考えられる教師と生徒の関係性について中井・庄司(2007)は、中学生の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着との関連について検討している。そして男女ともに幼少期に両親に対する安定した愛着を感じられたことが、教師に対する信頼感と正の相関を示し、拒否的な愛着を感じていたことが負の相関を示すことを明らかにし、女子における「母親への分離不安」「父親への分離不安」が生徒の教師に対する信頼感と正の相関があることを明らかにしている。

高橋(2005)は、男女を問わず小学校6年生前後を境に、子どもたちの依存対象が母親や父親から同世代の仲間に移行し、特に対人関係などの悩み事の相談相手は親から子ども同士へ移行するが、不登校やひきこもりの人の多くは、母親の優しさを引き出そうとすると述べている。また、母親への依存を極端に強めることを通して、子どもの対人関係の進展を図るにしても、こういった親子関係の特別な問題を理解しておくべきだと述べている。

先に述べたように、不登校の理由が多様化し本人の無気力や不安などによる情緒的混乱が不登校の大きな理由とされている。しかし、無気力や情緒的混乱となってしまった理由についてもさまざまな経緯が考えられるはずである。同様に不登校についても、親子関係の悪化が直接不登校へつながったり、友人関係の悪化が不登校へつながったりするような直接的な関係ではなく、親子との関係や友人との関係が相互に関連し絡み合いながら不登校に至るのではないかと考えられる。したがって、先行研究のように不登校と親への愛着との関連や、学校不適応の問題と信頼関係、また教師に対する信頼感と親への愛着などのように、ひとつの要因を理由として取りあげて研究するのではなく、親と友人の両者を含めた愛着について多角的包括的な側面から不登校などの学校不適応の問題との関連を探っていくべきではないだろうか。近年では、村木・高橋(2010)が中学生の精神的健康度を友人とのつきあい方と家族関係の築き方の両側面に焦点を当て、中学生が現在築いている友人関係および家族関係の満足感が精神的健康度

にどのような影響を与えているのかについて検討をした。その結果、友人関係満足感および家族関係満足感が高いと精神的健康度が高まる傾向にあることがわかり、特に友人関係満足感が精神的健康度により重要な影響を与えていると指摘している。

以上のことから、不登校および不登校傾向が親子の関係だけではなく、友人との関係とも深く関わっていると推察され、本研究では不登校と親子関係および友人関係との相互の関連性について愛着の観点から検討することを目的とする。さらに、親への愛着から友人への愛着への移行にも着目し、不登校傾向との関連について考えていくことにする。なお、本研究が不登校になった状態ではなく、不登校傾向を扱うのは、不登校になるとそれ自体が親子関係や友人関係に変化をもたらす、不登校にいたる要因を隠してしまう可能性があるからである。従って、本研究では、あくまで不登校にいたる前の不登校傾向と親子や友人関係、さらに適応状態との関係を扱うことにしたい。

親への愛着については、幼少期の頃を想起させ、回答を求めるものとする。しかし、回想法にはさまざまな問題を含んでおり、五十嵐・萩原（2004）は、回想法によって得られた幼少期の愛着は、当時に築かれた絶対的なもののみを反映しているわけではなく、現時点で想起可能なものであり、また現時点で築かれている親への愛着によって影響を受けていると述べている。また、佐藤（1993）も幼い頃の親子関係を正確に、客観的に知りたいのなら、青年の回想に頼るという方法には問題が多いと述べている。しかし、佐藤（1993）は一方で、青年の行動に影響を与えているのが、過去から現在に至るまでの愛着歴について今現在青年が抱えている表象であるなら、過去の回想は指標として重要な意味を持つことになるかと語っている。

本研究においても幼少期の親への愛着を探るために、回想法が有効な方法であると考え、採用することにした。

## 方法

### 1. 調査対象者

県内A市の2つの公立中学校、1年142名（男子71名、女子71名）、2年142名（男子72名、女子70名）、3年165名（男子76名、女子89名）で、合計449名であった。

### 2. 調査時期と手続き

2011年11月上旬に各学級の学級担任が一斉に実施し、その場で回収された。

### 3. 質問紙

以下に示す5つの部分からなる質問紙を構成し、フェイスシートに学校名、学年、性別を尋ねた後、以下の71項目について回答を求めた。

- 1) 不登校傾向尺度 五十嵐・萩原（2002）の「不登校傾向尺度」を一部修正した13項目を用いた。「あてはまる」～「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。
- 2) 幼少期の親への愛着尺度 佐藤（1993）の「親への愛着尺度」を調査対象者の負担を考慮して一部の項目表現を修正するとともに、教育的配慮から生徒の親への否定的感情を増長させるような表現のある項目を削除した計16項目を用いた。削除に当たっては、調査対象校の校長、教頭、および生徒指導担当教諭との話し合いをもち、議論を重ねた後に削除項目を決定した。削除項目は「親に捨てられてしまうかもしれないと思うことがあった」「親のことを、嫌いだと思うことがあった」の2項目である。また、佐藤（1993）は小学生時の親への愛着を尋ねているため「小学生だった頃」と教示しているが、本研究では、五十嵐・萩原（2004）の先行研究を参考に「幼い頃」と教示して回想させた。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

3) 友達とのつきあい方尺度 落合・佐藤 (1996) が作成した「友達とのつきあい方尺度」を用いた。栗林・田邊 (2009) の先行研究を参考にして、35項目のすべての質問のうち、調査対象者の負担を考慮して因子負荷量の高いもの (.70以上) を選択した15項目を用いた。「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

4) 最も深いつきあいの友人への愛着尺度 佐藤 (1993) の「親以外の対象への愛着尺度」の17項目を使用した。佐藤 (1993) の先行研究では親以外の不特定の愛着対象者を対象としていたため教示文では「その人」としていたが、本研究では最も深いつきあいの友人を特定させるため、「その人」ではなく「友人」と変更した。特定の友人を想起させインシヤルを書かせた後、「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

5) 親への愛着から友人への愛着への移行のプロセスに関する選択肢による質問と自由記述による質問

① 心配事や悩みがあった場合の親以外の相談相手を15の選択肢 (e.g. 担任, 保健室の先生, 友人, 兄弟姉妹, など) の中から複数回答で求めた。

② 友人の選択理由を5つの選択肢 (「友人といると悩みが解決できるから」「友人といないと不安だから」「いろいろなことで助けてくれるから」「趣味や活動が合って, 楽しいから」「友達というほうが楽だから」) から1つの選択で回答を求めた。選択肢を作成するにあたって, 浦 (1992) の分類した道具的サポートと情緒的サポートを参考にした。

③ ア 友達に相談するようになった時期を5つの選択肢 (「幼稚園」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学校」「ない」) から1つの選択で回答を求めた。また, その理由について自由記述で回答を求めた。イ 友達同士の隠しごとを始めた時期について5つの選択肢 (アと同様の選択肢) から1つの選択で回答を求めた。ウ 相談相手に親ではなく友人を選択した時期について6つの選択肢 (「幼稚園」「小学校低学年」「小学校高学年」「中学生」「まだ」「特にない」) から1つの選択で回答を求めた。また, そのきっかけについて自由記述で回答を求めた。エ 登校回避感情の有無について3つの選択肢 (「ある」「ない」「わからない」) から1つの選択肢で回答を求めた。さらに, 「ある」と回答した者についてのみ, その理由を自由記述で回答を求めた。オ 学校生活の満足度に関して「楽しくない」～「楽しい」の4件法で回答を求めた。

## 結果

### 1 各尺度の因子構造

各尺度の因子構造を確認するために, 不登校傾向尺度, 幼児期の親への愛着尺度, 友達とのつきあい方尺度, 最も深いつきあいの友人への愛着尺度のそれぞれについて, 主因子法およびプロマックス回転による因子分析を行った。因子得点の算出については回帰法を用いた。

#### 1) 不登校傾向尺度

まず, 不登校傾向について項目分析を行ったところ, 初期の固有値1を基準として3個の因子を抽出した。第1因子は「学校に行っても, 保健室や相談室で過ごしたい」(.842)「学校では, 授業より, 保健室や相談室の先生の先生と話したい」(.767)など, 学校へは登校しているものの教室以外での生活を希望しているため, 「別室登校を希望する不登校傾向」因子と命名した。第2因子は「学校へ行ったり家にいたりするより, それ以外の場所で友達とずっと遊んでいたい」(.750)「学校や自分の家で仲のいい友達と過ごすより, 友達の家で過ごす方が楽しい」(.593)など, 学校へは行かず友人と家や外で遊びたいと思っているため, 「遊び・非行に関連する不登校傾向」因子と命名した。第3因子は「学校に行かず, 家でゲームをして過ご

せたらと思う」(.672)「先生や友達と会いたいので、家にいるより学校に行きたい(逆転項目)」(-.630)など、学校へ行くよりも家にいたいと思っているため、「在宅を希望する不登校傾向」因子と命名した。各項目の因子負荷量と各因子の $\alpha$ 係数をTable 1に示す。

Table 1 不登校傾向尺度の因子分析結果

	I	II	III	共通性	平均値	SD
<b>I 別室を希望する不登校傾向 (<math>\alpha=.86</math>)</b>						
1. 学校に行っても、保健室や相談室で過ごしたい	0.84	-0.06	-0.01	0.69	1.35	0.68
11. 学校では、授業より、保健室や相談室の先生と話したい	0.77	0.08	-0.13	0.54	1.40	0.71
5. 教室に行かなくても保健室や相談室で勉強できればいいと思う	0.72	0.05	0.00	0.54	1.43	0.77
10. 学校に行くと、誰かに悪口を言われているような気がしてこわい	0.67	-0.01	0.01	0.45	1.80	0.95
3. 少しのことで気分が落ち込み、学校に行くのがつらい	0.63	0.05	-0.02	0.40	1.66	0.83
6. 学校に行くことを考えたら、頭が痛くなったり、気持ちが悪くなったりすることがある	0.57	-0.11	0.28	0.48	1.39	0.74
<b>II 遊び・非行に関連する不登校傾向 (<math>\alpha=.67</math>)</b>						
7. 学校へ行ったり家にいたりするより、それ以外の場所で友達とずっと遊んでいた	0.03	0.75	-0.07	0.52	2.57	1.00
4. 学校や自分の家で仲のいい友達と過ごすより、友達の家で過ごす方が楽しい	0.01	0.59	-0.18	0.26	2.46	0.94
13. 学校に行かず、家で友達と遊んでいた	-0.01	0.56	0.32	0.62	2.42	1.08
<b>III 在宅を希望する不登校傾向 (<math>\alpha=.61</math>)</b>						
8. 学校に行かず、家でゲームをして過ごせたらと思う	-0.11	0.12	0.67	0.51	2.19	1.06
12. 先生や友達と会いたいので、家にいるより学校に行きたい	-0.04	0.28	-0.63	0.28	2.69	0.90
2. 学校に行ってしまうは楽しいが、それまでは行きたくないと思っている	0.11	0.13	0.37	0.26	2.13	1.05
9. 夜おそくまで外で遊んでいて、学校に行くのがつらいと思うことがある	0.02	0.22	0.32	0.24	1.59	0.83
累積寄与率 (%)	28.95	40.69	44.58			
因子間相関	I	-	0.25	0.44		
主因子法、プロマックス回転	II		-	0.60		
	III			-		

## 2) 幼少期の親への愛着尺度

次に幼少期の親への愛着について因子分析を行ったところ、初期の固有値1を基準として4個の因子を抽出した。第1因子は「親にはげましてもらおうと元気が出た」(.915)「外であったできごとをよく親に話した」(.833)など、親への安心感と依存する関係を示していると考えられるため、「安心・依存」因子と命名した。第2因子は「親は、私のちょっとしたことで、よく気分を害した」(.700)「親からあまり好かれていないように感じるがあった」(.689)など、親への不信感や親を拒否する傾向の考えを示しているため、「不信・拒否」因子と命名した。第3因子は「親から離れてひとりで行動するのはこわかった」(.826)「親がそばについてくれないと不安だった」(.740)など、親離れをすることへの不安を示していると考えられるため、「分離不安」因子と命名した。第4因子は「親に何か相談したり、親の意見を聞いたりすることは少なかった」(.599)「心配事や悩みがあるとき、それを親に話した(逆転項目)」(-.585)など、親とのコミュニケーションを躊躇する感情を示しているため、「躊躇い」因子と命名した。各項目の因子負荷量と各因子の $\alpha$ 係数をTable 2に示す。

## 3) 最も深いつきあいの友人への愛着尺度

さらに、最も深いつきあいの友人への愛着尺度の因子分析を行った。因子負荷量が.30に満たない項目が見られたため、それを除外して再度因子分析を行った結果、初期の固有値1を基準として3個の因子を抽出した。第1因子は「友人には、本当の私は、理解できないと思う」(.745)「私は友人に、本当には心を許していない部分がある」(.718)など、友人との関わりを拒もうとする考えを示しているため、「拒否」因子と命名した。第2因子は「心配事や悩みがあるとき、友人に話したいと思う」(.839)「友人にはげましてもらおうと元気がでる」(.741)など、友人への安心感と依存する関係を示していると考えられるため、「安心・依存」因子と命名した。この因子は、親への愛着尺度の第1因子に対応していると考えられる。第3因子は

Table 2 幼少期の親への愛着尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV	共通性	平均値	SD
<b>I 安心・依存 (<math>\alpha=.80</math>)</b>							
2. 親にはげましてもらうと元気がでた	0.92	-0.02	-0.06	0.06	0.76	3.34	1.21
1. 外であつたできごとをよく親に話した	0.83	0.29	-0.16	-0.12	0.54	3.49	1.36
9. 親のことが好きだった	0.55	-0.31	0.18	0.14	0.60	3.70	1.16
6. 親は私の良い面も悪い面もわかってくれた	0.53	-0.24	0.01	0.00	0.45	3.72	1.15
<b>II 不信・拒否 (<math>\alpha=.75</math>)</b>							
8. 親は、私のちょっとしたことで、よく気分を害した	0.05	0.70	0.11	-0.01	0.46	2.54	1.23
11. 親からあまり好かれていないように感じるがあった	-0.05	0.69	0.05	0.06	0.55	2.15	1.23
14. 親は、私の本当の気持ちをわかっていなかった	-0.02	0.63	-0.08	0.15	0.54	2.55	1.22
3. 親に変わってほしいと思うことがあった	0.11	0.59	0.05	-0.04	0.29	2.72	1.36
<b>III 分離不安 (<math>\alpha=.72</math>)</b>							
10. 親から離れてひとりで行動するのはこわかった	-0.05	0.03	0.83	0.01	0.64	2.47	1.24
5. 親がそばについていてくれないと不安だった	0.02	0.06	0.74	0.00	0.56	2.35	1.21
13. できれば、親とだけいつも一緒にいたいと思った	0.10	-0.04	0.58	0.07	0.41	2.26	1.15
16. 親や家族以外の人とは、一緒にいても落ち着かなかつた	-0.23	0.12	0.49	-0.07	0.20	2.07	1.10
<b>IV 躊躇い (<math>\alpha=.69</math>)</b>							
7. 親に何か相談したり、親の意見を聞いたりすることは少なかつた	-0.05	-0.02	0.00	0.60	0.37	2.83	1.20
15. 心配事や悩みがあるとき、それを親に話した	0.34	0.14	0.13	-0.59	0.58	2.88	1.22
4. 親に悩みを話すのは、はずかしく感じた	0.13	0.14	0.11	0.52	0.33	2.84	1.27
12. 何か困ったことがあつても親に頼ることはできなかつた	0.06	0.34	-0.02	0.51	0.50	2.25	1.16
累積寄与率 (%)	25.15	38.75	44.42	48.49			
因子間相関	-	-0.43	0.49	-0.41			
主因子法、プロマックス回転	II	-	-0.09	0.46			
	III		-	-0.01			
	IV			-			

「友人が私から離れていくのがこわくて、本当の気持ちを言にくいときがある」(.661)「友人には、私以外の誰ともあまり親しくしてほしくない」(.590)など、友人との分離や友人との関係の保持に対する不安感をもっているために、この因子を「不安」因子と命名した。各項目の因子負荷量と各因子の $\alpha$ 係数をTable 3に示す。

Table 3 最も深いつきあいの友人への愛着尺度の因子分析結果

	I	II	III	共通性	平均値	SD
<b>I 拒否 (<math>\alpha=.81</math>)</b>						
6. 友人には、本当の私は、理解できないと思う	0.75	0.02	-0.02	0.53	2.62	1.17
5. 私は友人に、本当には心を許していない部分がある	0.72	-0.03	-0.02	0.53	2.55	1.21
13. 友人とは、今は親しくしているが、いずれ、それほどでもなくなってしまうような気がする	0.62	-0.01	0.03	0.41	2.72	1.29
11. 例え友人とでも、一緒にいると無性にひとりになりたくなることがある	0.60	0.04	-0.10	0.31	2.54	1.27
14. 私は友人のことで、よく不安になったり、いらだったりする	0.59	0.13	0.21	0.44	2.47	1.19
17. たとえ友人でも、あまり私の心の中に踏み込んでほしくない	0.48	-0.20	0.06	0.39	2.58	1.12
<b>II 安心・依存 (<math>\alpha=.76</math>)</b>						
1. 心配事や悩みがあるとき、友人に話したいと思う	0.10	0.84	-0.06	0.63	3.66	1.21
4. 友人にはげましてもらうと元気がでる	0.09	0.74	0.02	0.50	4.11	0.95
12. 友人に素直な気持ちを話すことができる	-0.04	0.60	-0.23	0.41	3.73	1.14
7. 友人は、私の良い面も悪い面もわかってきている	-0.09	0.52	0.03	0.32	3.71	0.96
16. つらいときや悲しいとき、友人を思い出す	-0.12	0.43	0.32	0.35	2.86	1.20
<b>III 不安 (<math>\alpha=.67</math>)</b>						
9. 友人が私から離れていくのがこわくて、本当の気持ちを言にくいときがある	0.12	-0.01	0.66	0.51	2.44	1.33
8. 友人には、私以外の誰ともあまり親しくしてほしくない	0.01	-0.04	0.59	0.35	1.73	1.01
15. 友人には、私の知らない世界を持ってほしくないと思う	0.02	-0.15	0.56	0.33	2.13	1.07
10. 友人がいなければ、私は何もできないと思う	-0.03	0.12	0.54	0.31	2.66	1.28
2. できれば、友人とだけ、いつも一緒にいたいと思う	-0.15	0.27	0.37	0.25	3.39	1.15
累積寄与率 (%)	22.79	36.41	40.96			
因子間相関	I	-	-0.46	0.38		
主因子法、プロマックス回転	II		-	0.10		
	III			-		

## 2 不登校傾向と親への愛着および友人への愛着による重回帰分析

それぞれの不登校傾向と親および友人への愛着との関連を探るため、不登校傾向の3因子を従属変数、親への愛着および友人への愛着の各尺度の因子の7因子を説明変数とした、一括投入法による重回帰分析を行った。結果をTable 4に示す。

Table 4 不登校傾向因子を従属変数とし親と友人への各愛着因子を説明変数とする重回帰分析

		親 安心依存 因子	親 不信拒否 因子	親 分離不安 因子	親躊躇い 因子	友人拒否 因子	友人 安心依存 因子	友人不安 因子
別室登校希望する不登校因子	$\beta$ 値	-0.174	0.136	0.347	-0.087	0.173	0.082	0.211
	有意確率	0.01	0.02	0.00	0.12	0.01	0.16	0.00
遊び非行に関連する不登校傾向因子	$\beta$ 値	-0.090	0.050	-0.024	0.044	0.020	-0.025	0.173
	有意確率	0.24	0.45	0.72	0.50	0.79	0.70	0.01
在宅を希望する不登校因子	$\beta$ 値	-0.237	0.040	0.219	-0.098	0.075	-0.179	0.080
	有意確率	0.00	0.53	0.00	0.12	0.31	0.01	0.20

分析の結果、 $\beta$ が有意で特に高い数値を示す説明変数をあげると、「別室登校を希望する不登校傾向」では、親への愛着における「分離不安」( $\beta=.347$ )と、友人への愛着における「不安」( $\beta=.211$ )が有意な説明変数となった。また、「在宅を希望する不登校傾向」では、親への愛着での「安心・依存」( $\beta=-.237$ )が負に、「分離不安」( $\beta=.219$ )が正に、友人への愛着の「安心」( $\beta=-.179$ )が負に有意に寄与していた。一方で、「遊び・非行に関連する不登校傾向」には明らかに有意な項目は親への愛着と友人への愛着のどちらにも見られなかった。

## 3 親への愛着と友人への愛着による分類

### 1) クラスタ分析および分散分析

次に、親への愛着と友人への愛着それぞれを独立して不登校傾向に影響するものと捉えるのではなく、関連のある親と友人への愛着という2つの要因を1つの側面として捉え、不登校との関係を見出していくためにクラスタ分析を行った。親への愛着尺度(4因子)と友人への愛着尺度(3因子)のそれぞれの因子の7変数を投入変数(Ward法-平方ユークリッド距離)として扱った。その結果、デンドログラム(樹形図)を検討して5つのクラスタが適当であると考えられたので、調査対象者を5群に分類した。各クラスタの人数は、クラスタ1(139人)、クラスタ2(69人)、クラスタ3(81人)、クラスタ4(50人)、クラスタ5(82人)であった。

さらに、5つのクラスタの特徴を明らかにするために、親への愛着と友人への愛着の尺度の各因子の因子得点を従属変数とし、クラスタを独立変数とした1要因5水準での一元配置の分散分析を実施した。親への愛着と友人への愛着尺度の各因子の因子得点をFigure 1に示す。

その結果、「親安心・依存」( $F(4,416)=127.060, p<.01$ )、「親不信・拒否」( $F(4,416)=56.408, p<.01$ )、「親分離不安」( $F(4,416)=64.934, p<.01$ )、「親躊躇い」( $F(4,416)=78.634, p<.01$ )、「友人拒否」( $F(4,416)=125.384, p<.01$ )、「友人安心・依存」( $F(4,416)=65.209, p<.01$ )、「友人不安」( $F(4,416)=39.385, p<.01$ )のすべてでクラスタ(以下CL)の主効果が見られた。Tukey法による多重比較の結果( $p<.05$ )、各クラスタはTable 5に示すような特徴が見られた。

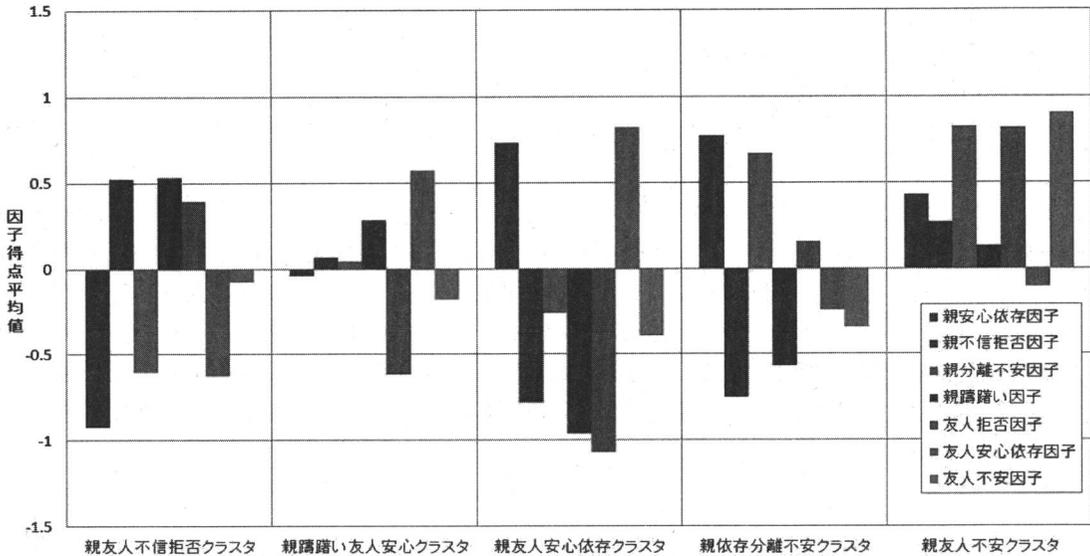


Figure 1 各クラスタにおける親および友人愛着因子得点

Table 5 各クラスタの特徴

	親安心依存	親不信拒否	親分離不安	親躊躇い	友人拒否	友人安心依存	友人不安
CL1	低い	高い	低い	高い	やや高い	低い	やや低い
CL2	中程度	やや高い	中程度	やや高い	中程度	やや高い	やや低い
CL3	高い	低い	やや低い	低い	低い	高い	低い
CL4	高い	低い	高い	やや低い	やや高い	中程度	低い
CL5	やや高い	やや高い	高い	中程度	高い	中程度	高い

第1クラスタは親への愛着の「不信・拒否」「躊躇い」が高く、友人への愛着の「拒否」もやや高かったことをふまえ、親に対して友人に対しても拒否をする傾向にあり、コミュニケーションをとろうとしない子どもの群と考えられるところから「親友人不信・拒否クラスタ」と名付けた。第2クラスタは親への愛着の「躊躇い」が高く、友人への愛着の「安心・依存」が高かったことをふまえ、親との関係において消極的な態度であるが、友人との関係を保とうとする姿勢が見られるため、「親躊躇い友人安心クラスタ」と名付けた。第3クラスタは親への愛着の「安心・依存」が高く、友人への愛着の「安心・依存」が高く、「拒否」が低かったことをふまえ、親との関係、友人との関係ともに精神的に安定している状態の子どもの群と考えられ、「親友人安心・依存クラスタ」と名付けた。第4クラスタは親への愛着の「安心・依存」が高く、「分離不安」も高かったことをふまえ、友人との仲よりも親との関係を重視し、親と離れることに不安を抱え、依存している状態の子どもの群と考えられ、「親依存分離不安クラスタ」と名付けた。また、第5クラスタは親への愛着の「分離不安」が高く、友人への愛着の「拒否」と「不安」が高かったことをふまえ、親との関係・友人との関係ともに不安を抱え、親と離れることもできず、友人を拒否しながらも仲よしでいたいというアンビバレントな状態

の子どもの群と考えられ、「親友人分離不安クラスタ」と名付けた。

#### 4 親友人愛着クラスタと不登校との関連

##### 1) 不登校傾向尺度との関係

各クラスタ間での不登校傾向の因子得点を一元配置分散分析により比較した。因子得点を比較し、グラフ化することで検討をした (Figure 2)。「別室登校を希望する不登校傾向」では、第5クラスタの「親友人分離不安クラスタ」が最も高い値を示した。「遊び・非行に関連する不登校傾向」では、「親友人不信・拒否クラスタ」が高かった。また、「在宅を希望する不登校傾向」では、「親友人安心・依存クラスタ」が最も低かった。しかし、「親友人安心・依存クラスタ」はすべての不登校傾向において最も低い得点を示しており、不登校の防止にとって親や友人に対する安心感が重要であることが示唆された。また、親や友人に対して「分離不安」や「不安」を感じると、「別室登校を希望する不登校傾向」や「在宅を希望する不登校傾向」になりやすい傾向にあると言える。

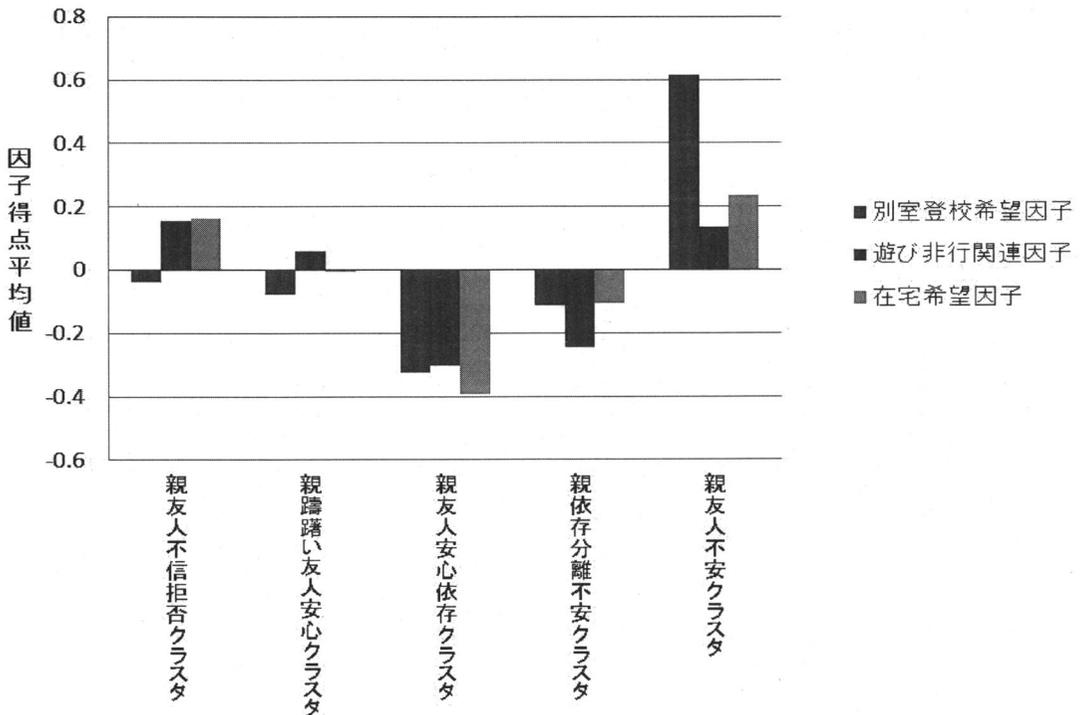


Figure 2 各クラスタにおける不登校傾向因子得点

##### 2) 友人相談理由との関連

次に、5つの親友人愛着クラスタと友人相談理由についての関連について、回答のパターンにおける相違を検討するために $\chi^2$ 検定を行った。その結果、回答のパターンにおいて有意な差があることが示された ( $\chi^2=27.7$ ,  $df=16$ ,  $p<.05$ )。そこで、残差分析を行った結果、Table 6に見られるように、第1クラスタ「親友人不信・拒否クラスタ」では「いろいろなことで助けてくれるから」は有意に少なくなり、「友達といるほうが楽だから」が有意に多い結果となった。また第5クラスタ「親友人分離不安クラスタ」では、第1クラスタとは逆に、「いろいろなことで助けてくれるから」が有意に多くなる結果となった。

Table 6 親友人愛着クラスと友人相談理由のクロス表

		悩み解決	不安	援助	楽しい	楽	合計
親友人不信・拒否クラス	度数	6	8	24	62	37	137
	期待度数	8.9	5.6	33.4	62.9	26.1	137
	調整済み残差	-1.2	1.2	-2.3	-0.2	2.9	
親躊躇い友人安心クラス	度数	5	1	13	34	16	69
	期待度数	4.5	2.8	16.8	31.7	13.2	69
	調整済み残差	0.3	-1.2	-1.2	0.6	1	
親友人安心・依存クラス	度数	8	4	23	34	9	78
	期待度数	5.1	3.2	19	35.8	14.9	78
	調整済み残差	1.5	0.5	1.2	-0.5	-1.9	
親依存分離不安クラス	度数	2	0	14	28	5	49
	期待度数	3.2	2	12	22.5	9.4	49
	調整済み残差	-0.7	-1.5	0.7	1.7	-1.7	
親友人分離不安クラス	度数	6	4	27	32	12	81
	期待度数	5.3	3.3	19.8	37.2	15.5	81
	調整済み残差	0.4	0.4	2.1	-1.3	-1.1	
合計	度数	27	17	101	190	79	414
	期待度数	27	17	101	190	79	414

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	27.716a	16	0.03
尤度比	30.191	16	0.02
線型と線型による連関 有効なケースの数	7.01 414	1	0.01

Table 7 親友人愛着クラスと友人相談移行時期のクロス表

		幼稚園	小低学年	小高学年	中学生	ない	合計
親友人不信・拒否クラス	度数	1	11	44	21	62	139
	期待度数	1.3	7.3	53.9	31.4	45	139
	調整済み残差	-0.3	1.7	-2.1	-2.6	3.8	
親躊躇い友人安心クラス	度数	0	5	36	17	11	69
	期待度数	0.7	3.6	26.8	15.6	22.3	69
	調整済み残差	-0.9	0.8	2.5	0.4	-3.2	
親友人安心・依存クラス	度数	1	4	31	23	22	81
	期待度数	0.8	4.2	31.4	18.3	26.2	81
	調整済み残差	0.3	-0.1	-0.1	1.4	-1.1	
親依存分離不安クラス	度数	0	0	15	14	20	49
	期待度数	0.5	2.6	19	11.1	15.9	49
	調整済み残差	-0.7	-1.8	-1.3	1.1	1.3	
親友人分離不安クラス	度数	2	2	37	20	21	82
	期待度数	0.8	4.3	31.8	18.5	26.6	82
	調整済み残差	1.5	-1.3	1.3	0.4	-1.5	
合計	度数	4	22	163	95	136	420
	期待度数	4	22	163	95	136	420

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	36.876a	16	0.00
尤度比	40.825	16	0.00
線型と線型による連関 有効なケースの数	0.644 420	1	0.42

## 3) 親から友人への相談移行および選択理由との関連

さらに、友人への相談移行時期との関連について、同様に $\chi^2$ 検定を行った。検定の結果、有意な差が認められた( $\chi^2=36.9$ ,  $df=16$ ,  $p<.01$ )。そこで、残差分析を行った結果、Table 7に見られるように、第1クラスタ「親友人不信・拒否クラスタ」では、親や友人に対しての不信感や拒否する感情を抱いているため「相談しない」を選択する者が有意に多い結果となった。また、時期についても「小学校高学年」「中学生」を選択するものが有意に少なかった。一方、第2クラスタ「親躊躇い友人安心クラスタ」では、友人への安心感を抱いているため、「相談しない」を選択しているものは有意に低い結果となり、友人を相談相手として選択しているものが多いということが推察される。また、相談時期においては、「小学校高学年」のころが有意に多い結果となった。

また、友人を選択するようになった理由について、親友人愛着クラスタとの関連を探った。まず、友人を選ぶ理由について自由記述されたものをKJ法によって10のカテゴリーに分けた。分けられたカテゴリーは、0:未記入, 1:友人は話しやすい, 2:友人だとわかってくれる, 3:友人と過ごす時間が長くなった, 4:自然と親と話さなくなった, 5:親に話すと面倒, 6:親に言うのがはずかしい/親に迷惑をかける, 7:友人と親の両方に話す, 8:その他, 9:相談しない/相談することがない, となった。そこで、相談理由と親友人愛着クラスタとの関連について、同様に $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意な差が認められた( $\chi^2=53.9$ ,  $df=36$ ,  $p<.05$ )。残差分析を行った結果、Table 8に見られるように、第1クラスタ「親友人不信・拒否クラスタ」では、「相談しない」を選択したものが有意に多く選択されていた。また、第2クラスタ「親躊躇い友人安心クラスタ」では、「話しやすい」を選択したものが有意に多かった。

Table 8 親友人愛着クラスタと友人選択理由のクロス表

		未記入	話しやすい	理解	生活時間	話さない	親面倒	嫌がらない	両方	その他	しない	合計
親友人不信・拒否クラスタ	度数	48	24	19	5	5	11	4	2	3	18	139
	期待度数	39.6	31.7	20.5	6.9	2.6	8.3	8.6	2.6	7.3	10.9	139
	調整済み残差	1.9	-1.9	-0.4	-0.9	1.8	1.2	-2	-0.5	-2	2.7	
親躊躇い友人安心クラスタ	度数	12	24	12	4	2	1	5	0	4	5	69
	期待度数	19.7	15.7	10.2	3.4	1.3	4.1	4.3	1.3	3.6	5.4	69
	調整済み残差	-2.2	2.6	0.7	0.3	0.7	-1.7	0.4	-1.3	0.2	-0.2	
親友人安心・依存クラスタ	度数	22	18	17	7	0	4	5	2	4	2	81
	期待度数	23.1	18.5	11.9	4	1.5	4.8	5	1.5	4.2	6.3	81
	調整済み残差	-0.3	-0.1	1.8	1.7	-1.4	-0.4	0	0.4	-0.1	-2	
親依存分離不安クラスタ	度数	14	12	3	2	0	3	4	3	4	5	50
	期待度数	14.3	11.4	7.4	2.5	1	3	3.1	1	2.6	3.9	50
	調整済み残差	-0.1	0.2	-1.9	-0.3	-1	0	0.6	2.3	0.9	0.6	
親友人分離不安クラスタ	度数	24	18	11	3	1	6	8	1	7	3	82
	期待度数	23.4	18.7	12.1	4.1	1.6	4.9	5.1	1.6	4.3	6.4	82
	調整済み残差	0.2	-0.2	-0.4	-0.6	-0.5	0.6	1.5	-0.5	1.5	-1.6	
合計	度数	120	96	62	21	8	25	26	8	22	33	421
	期待度数	120	96	62	21	8	25	26	8	22	33	421

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearson のカイ 2 乗	53.947a	36	0.03
尤度比	58.174	36	0.01
線型と線型による連関	0.083	1	0.77
有効なケースの数	421		

また、第4クラス「親依存分離不安クラス」では、「友人だとわかってくれる」が有意に低く、「友人と親の両方に話す」が有意に高く選択されている。

## 考察と今後の課題

### 1 考察

今回の分析の結果明らかにされた親および友人愛着クラスと不登校傾向との横断的な考察をする。

「親友人不信・拒否クラス」の生徒は、親に対しても友人に対してもコミュニケーションをとろうとしない、拒否の態度を示す傾向にある子どもの群である。したがって、相談事や悩みごとがあった場合は親にも友人にも相談をしようとはせず、自力で解決をしようと考えている。また、親から友人への愛着の移行において、積極的に友人を選択するのではなく、親よりも友人といる方が楽であるために友人を選択していることが示された。そこには、悩みを解決してくれたり、助けてくれたり、という道具的なサポートを期待しているわけではなく、一緒にいることで心の安定を図ろうとしていると考えられる。一方、不登校傾向との関連においては、「遊び・非行に関連する不登校傾向」との相関が認められた。これは、酒井ら（2002）の先行研究の結果とは一致しなかった。「親友人不信・拒否クラス」は、友人や親との関係を拒む傾向のある子どもの群であり、クラスや学校に入ることができず、また家にも戻ることができないために、どこにも安心していられる場所がなく校外や家の外に出るしかないのだと考えられる。酒井ら（2002）の親友との信頼関係と「反社会的傾向」との関連、および本研究の友人への愛着と「遊び・非行に関連する不登校傾向」との関連の2つの考え方については今後も検討が必要であろう。

「親躊躇い友人安心クラス」においては、親への愛着の「躊躇い」が高く、友人への愛着の「安心・依存」が高い結果となった。つまり、親との関係において消極的な態度で、親との会話などを躊躇してしまう傾向が見られた。一方で、友人との関係を保とうとする姿勢が見られ、悩み事がある場合には話しやすい友人に相談する傾向も見られた。親離れが少し進み、愛着の対象が親から友人へと移行している子どもの群だと言える。学校への満足度についても、「楽しい」と答えるものが有意に多く、友人との関係が良好であることが重要な要因であると考えられる。また、不登校傾向との関連を検討すると、この群はどの不登校傾向のタイプも高く見られなかった。しかし、親への愛着における「躊躇い」因子は3つのどの不登校傾向とも負の相関の関係にあり、いかに友人との心理面での安心感が不登校傾向を低めているかがわかる。

「親友人安心・依存クラス」は、親への愛着の「安心・依存」が高く、同様に友人への愛着の「安心・依存」が高い結果となった。つまり、親との関係、友人との関係ともに安定している状態の子どもの群であると考えられる。不登校傾向との関連を検討すると、不登校傾向因子得点平均値がどのクラスよりも低く、不登校になりにくいクラスであると判断できる。また、学校満足度についても「楽しい」と答えたものが有意に多かった。この結果からもわかるように、友人および親への安心感がいかに不登校傾向と関連しているかが理解できる。

「親依存分離不安クラス」は、親への愛着の「安心・依存」が高く、「分離不安」も高かった。友人よりも親との関係を重視し、親と離れることに不安を抱えているために依存することで、親と子の関係を保とうとしている状態の子どもの群と考えられる。友人への相談理由との関連において、「友人と親の両方に話す」のカテゴリーが有意に高かった。つまり、相談事や悩みがあった場合に、友人よりも親の方がより自分のことを理解してくれるだろうと考え、親

に相談することになり、親に依存している子どもだと考えられる。重回帰分析の結果より、「在宅を希望する不登校傾向」と「別室を希望する不登校傾向」の2つの不登校傾向への影響が考えられる。つまり、学校での友人とのつながりよりも、分離不安によって在宅で親とつながりを保とうとしたり、別室登校によって親の代理としての養護教諭やスクールカウンセラーとのつながりから安心感を得ようとしたりしていると考えられる。

「親友人分離不安クラスター」は、親との関係・友人との関係ともに不安を抱え、親と離れることへの不安と親離れをしたいという願望とで葛藤し、友人を拒否しながらも仲よしでいたいというアンビバレントな状態の子どもの群と考えられ、5つのクラスターの中で最も葛藤のあるクラスターと言える。学校への満足度はあまり楽しいとは思っておらず、不登校傾向との関連においても「別室登校を希望する不登校傾向」との関係があり、すべてのクラスターの中でもっとも因子得点の平均値が高い結果となった。

不登校もしくは不登校傾向と親や友人との関係を探っていくと、子どもの親や友人に対する愛着がアンビバレントな状態である様子が明らかになってきた。思春期にある中学生が親を拒み、依存したくないという気持ちの裏に、親とは離れたくない、安心感を保ちたいという気持ちが存在し、さらに、親に心配かけさせたくない、相談するのがはずかしいなど子どもが親に遠慮する姿勢も垣間見られた。親の仕事が忙しく、ゆっくり話す時間が取れなかったり、自分で解決しなければいけないと強迫的に考えてしまったりするなどの理由が考えられるのではないだろうか。また同様に、友人との関係においても、拒否したいと思いつつも、仲良しでいたい、嫌われたらどうしようという不安との間で葛藤している子どもたちの姿が浮かび上がってきた。それらの不安の中で、友達との関係が些細なことで崩れたり、成績や進路に対する不安が重なったり、家庭環境が著しく変化したりするなどのきっかけで不登校となってしまうのではないだろうか。

## 2 今後の課題

本研究の結果を多くの先行研究の結果と比較すると、先行研究を支持する結果となっていないものもあった。その理由のひとつとして、調査対象の中学校の地域性が考えられるのではないだろうか。本研究は狭い地域での2校の調査であったが、より普遍性を求めるためにも、さまざまな地域の中学校による調査を実施するべきだったように思われる。またさらに、調査対象の地域による比較も行うと、より興味深い分析結果が見られるかもしれない。

また、落合・佐藤(1996)による友達とのつきあい方と不登校傾向との関連についての分析と、その考察ができなかった。二次元で表現された友達とのつきあい方の4つのパターン(①浅く広くかかわるつきあい方、②浅く狭くかかわるつきあい方、③深く狭くかかわるつきあい方、④深く広くかかわるつきあい方)と不登校傾向および親友人愛着クラスターとの関連について分析することによって、友達とどのようなつきあい方をする子どもが不登校に陥りやすいのかについて明らかにするためにも、今後の継続的な研究が必要であろう。また、本研究では学年差や性差について検討することができなかったので、中1ギャップへの取組を視野に入れながら今後の研究を進めていきたい。

今回の研究では因子得点を用いた分析を行った。しかし、因子得点では不登校傾向の有無について相対的な評価にとどまっており、実態を直接反映したものとなっていない。そこで、尺度得点を用いた分析を今後は試みたいと考えている。そのことにより、より生徒の実態に沿った不登校傾向が明確になり、生徒の臨床像の把握から支援へとつながるのではないだろうか。さらに、不登校の予防的観点からも、不登校傾向のある生徒とない生徒のグループに分け、そ

これらの親と友人への愛着の違いについて検討をすることも有効であろうと考える。

以上のように、本研究で明らかにされた不登校および不登校傾向と、親との関係および友人関係との関連性を通して、不登校および不登校傾向の生徒を早い時期に気づいたり発見したりすることが可能なのではないかと考える。さらに、不登校の恐れや早期の発見から生徒やその家族への指導や支援へとつなげていけるのではないだろうか。学校現場の教員が、児童生徒の家族構成を把握し、家庭訪問や親との懇談を通して、また、子どもとの雑談などを通して親子の様子を感じ取ったり、普段の様子から友人とのつきあい方や友人関係を把握したりすることで、不登校における早期の対策を講じることができないのではないかと考える。不登校の児童生徒が学校にまた元気に登校できるように、少しでも子どもたちが明るい笑顔を取り戻すことができるように、家族、学校現場の全教職員、心理士やスクールカウンセラー、また、外部相談機関などが連携をしながら、児童生徒への支援を続けていきたい。

### <引用文献>

- Bowlby, J (1969). Attachment and Loss, Vol.1: Attachment. New York: Basic Books.
- Bowlby, J (1973). Attachment and Loss, Vol.2: Separation. New York: Basic Books.
- Bowlby, J (1980). Attachment and Loss, Vol.1: Loss. New York: Basic Books.
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2002). 中学生における不登校傾向に関する研究 (1) - 不登校傾向尺度の開発 - 日本教育心理学会総会発表論文集 (44) , 275.
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.
- 石川瞭子 (2000). 不登校と父親の役割 青弓社
- 栗林尚美・田邊敏明 (2009). 中学生における対人関係目標と対人不安の違いによる対人関係スキルトレーニングの効果 山口大学研究論叢 第3部 芸術・体育・教育・心理, 59, 207-222.
- レーベン心理相談研究所 (2011). 不登校の統計について  
<http://blog.leben-jp.net/search/label/%E4%B8%8D%E7%99%BB%E6%A0%A1> (閲覧日、平成24年1月5日)
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2011). 平成22年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について
- 森田洋司 (1991). 「不登校」現象の社会学 学分社
- 村木美香・高橋道子 (2010). 中学生の友人関係、家族関係と精神的健康度の関連 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 61 (1) , 195-204.
- 中井大介・庄司一子 (2007). 中学生の教師に対する信頼感と幼少期の父親および母親への愛着との関連 パーソナリティ研究, 15 (3) , 323-334.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, 44 (1) , 55-65.
- 小澤美代子 (2011). 効果的な登校刺激 金子書房 児童心理, 65 (9) , pp.67-75.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 佐藤朗子 (1993). 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要, 40, 215-226.

高橋良臣 (2005). 不登校・ひきこもりのカウンセリング 金子書房  
浦 光博 (1992). 支えあう人と人—ソーシャルサポートの社会心理学 サイエンス社